

防災コンテスト（防災ラジオドラマ） 埼玉県久喜市中央公民館

この物語はフィクションです。

都心から約50km、久喜市は、埼玉県の東北部にあります。

交通の便が良く、豊かな自然も残っていて、とても、住みやすいところです。

これまで、昭和22年のカスリーン台風による被害を除いて、大きな災害に見舞われたことはなく、みんな平穏に暮らしていました。

針ヶ谷雪絵（42歳）、久喜で生まれ育ち、久喜市久喜中央に夫（忠相）と子ども2人（忠宜）（忠高）、夫の母（妙）と2世帯住宅に暮らしている平凡な主婦である。

気さくな性格で面倒見がよく、人に頼まれると嫌と言えないので、子どもの通う小学校のPTA役員や市の民生委員児童委員、区の班長をしながら、近くの公民館で非常勤職員として働いている。

なにかと忙しい毎日ではあるが、本人は楽しく過ごしている。

今日は、金曜日。朝、いつものように、夫と子どもたちを送り出した。

今日は、公民館の仕事はない。

義理の母（妙）は、その公民館に民謡の練習に出かけた。

家事を終わらせ、一息ついた午前9時03分、突然、携帯電話から緊急警戒音が鳴り響いた。

「地震が来る！ 大きい！」そう感じた。数秒して、大きな揺れが起こった。家全体を揺るがす大きな地震。

とっさにダイニングテーブルの下に隠れる。今までに経験した地震と違い、揺れている時間が長い。

台所の食器棚から食器やグラスが落ち、割れる音が続いている。

先月「埼玉県家具固定サポーター登録制度」を利用して固定した居間の家具は、転倒することも無く、中のものが落下することもなかった。

台所は、割れた食器やグラスが床に散乱している。食器棚も来週に固定する予定であった。

揺れが収まったので、外に出てみた。

向かいの家の御影石の塀が無残にも倒れている。屋根瓦が落ち、傾いている家もある。

愕然ってこういうことなのだろうか、ただ、周りの様子を立って眺めていた。

近くの家々から住人が出てきた。

みんな、あまりにも変わってしまった景色に、言葉にならない声をあげている。

その時、また、大きく揺れだした。

余震だ！

針ヶ谷雪絵「みなさん 公民館に避難しましょう！」

雪絵は、周りの人々に声をかけ、電気のブレーカーを落とし、ガスの元栓を閉めて、玄関に用意してあった避難袋を持ち、久喜中央住民の避難所になっている中央公民館に向った。途中、何軒かのブロック塀が道に倒れているのを見た。遠回りになっても、安全な道を選んで進んだ。公民館に着くと、既に多くの人々が避難してきていた。

雪絵の職場でもある1階の事務室に向う。

事務室の前で義理の母に会うことができた。

針ヶ谷雪絵「お母さん！」

針ヶ谷妙「雪絵さん！良かった無事だったのね。家は大丈夫だった？ 忠相と連絡はとれたの？ 忠宜たちは無事かしら？」

針ヶ谷雪絵「忠相さんの携帯につながりません。小学校は・・・」

そこに、雪絵を見つけた、中央公民館職員が駆け寄ってきた。

公民館職員「針ヶ谷さん 無事で良かった。今、小学校から連絡があって、子どもたちは、全員無事だそうですよ。これから、館内の人に連絡するところです。」

針ヶ谷雪絵「ああ よかった！」

久喜市では、市役所、消防署、警察、各避難所、小中学校、高校を繋ぐ、災害時用の電話回線が設置されていて、災害時には、各学校は児童、生徒、学生の安否を他の施設に知らせることになっている。

公民館職員「針ヶ谷さん 後で避難所開設のお手伝いをお願いします。」

針ヶ谷雪絵「はい 区の仕事が終わりましたら、すぐに行きます。」

公民館職員 拡声器「館内の皆さんにお知らせします。小学校と中学校から連絡があり、子どもたちは全員無事です。」

中央公民館周辺は、停電であったため電気が使えなかった。

地震の震度などの詳しい情報は、駐車場の車のラジオから集めた。

公民館職員は、目下、避難所開設に向けて行動中である。

館内の安全確認を済ませ、諸室に机や椅子を配置し、避難者の休息スペース作りや、配給物資を置くスペースの確保などに奔走している。

日ごろ、中央公民館の運営に携わっている、地域の住民で構成された中央公民館運営委員も駆けつけ、一緒に避難者への対応、これから公民館に来るであろう帰宅困難者の対応の準備を進めている。

中央公民館運営委員 小林「館長！ 私たちは、炊き出しの準備をします。」

中央公民館長「よろしくをお願いします。必要なものは、備蓄倉庫から持ってきます。」

中央公民館運営委員 橋本「私は、館内の様子を見てきます。」

中央公民館運営委員 高田「私は、公民館周辺のパトロールをしてきます。」

なにかあれば、公民館に駆けつけて手伝ってくれる。中央公民館は地域の人の善意に支えられている。

雪絵が母と一緒に公民館1階の大きな部屋に入ると、そこに区長さんがいた。

区長「おう 針ヶ谷さん 無事で良かった。」

区長「早速で悪いが、針ヶ谷さん 第1班の避難状況の確認をお願いします。」

針ヶ谷雪絵「はい わかりました。」

班長である針ヶ谷家は、公民館に母と雪絵本人、小学校に子ども2人がいる。夫は東京の会社で連絡はとれない状況である。班名簿にその旨を記入する。

雪絵が班長を務める第1班は、10世帯あり、その内6世帯が公民館に避難してきていた。

6世帯の避難者に家族の状況を訊き、班名簿に記入して区長に報告する。

針ヶ谷雪絵「報告します。第1班は、10世帯のうち、6世帯の避難を確認しました。4世帯が避難していません。」

第2班、第3班・・・と報告は続く

区長「それでは、災害時行動マニュアルのとおり、これから救出隊を編成します。皆さん協力してください。」

久喜中央では、毎年、区長を中心に防災訓練を行っており、災害時の行動マニュアルが作られていた。

ここに、その一部を紹介する。(久喜中央は、18班 約200世帯)

- ①. 久喜中央の住民は、災害発生時には、中央公民館に避難する。
- ②. 避難の際は、電気のブレーカーを落とし、ガスを止め、各自準備してある避難袋を携行する。
- ③. 避難路は、予め定めておくが、目視により安全な道を確認しながら公民館に向う。
- ④. 各世帯は、家族の状況を班長に報告する。
- ⑤. 各班の班長は、公民館で避難者を確認し、予め災害時用に定めた班名簿に記入し、区長に報告する。
- ⑥. 区長は、避難者の中から救出隊を3隊編成する。1隊5人編成とし、住民は、これに協力するものとする。
- ⑦. 区長は、救出隊に区内の未避難者の安否の確認及び救出に向うよう指示する。
- ⑧. 救出隊1隊に6人の班長が同行し、順番に各班の未避難者の安否の確認救出を行うものとする。
- ⑨. 救出隊の携行器材は、別紙のとおり
- ⑩. 負傷者がいた場合には、中央公民館に搬送する

など 災害時行動マニュアルの一部を抜粋

区長の指示により、避難者の中から救出隊を編成した。

救出隊のメンバーは、自主防災組織のメンバーや地域の消防団OBである災害支援隊員、市民体育祭の際、綱引き競技に参加した力持ちの選手、地元の大工さんなどを中心に3隊を編成することができた。

区長が救出隊に未避難者の安否の確認に出動するよう指示を出す。

区長「それでは、手はずどおり、救出隊はヘルメット着用、器材を携行して、所定の班の班長と共に、担当区域の未避難者の安否確認に向ってください。くれぐれも、二次災害にあわないように気を付けてください。」

雪絵も班長なので救出隊と同行することになる。班名簿も携行することになっている。

雪絵は、救出隊が準備している間に、夫（忠相）に自分たちが無事であることを知らせるため、公民館の公衆電話から「災害用伝言ダイヤル171」に録音した。

針ヶ谷雪絵「お母さん 私は、救出隊と一緒に、ここに居ない班の人たちを見にいきます。子どもたちの迎えをお願いしてもいいですか？」

子どもに直ぐ会いたかったが 班の仕事をしなければと思った。小学校からの一報がなければ、子どもを迎えに行っていたらと思う。

針ヶ谷妙「わかったわ！ まかしておいて！」

救出隊が、雪絵の住んでいる第1班の地域へ向う途中、道には電柱が倒れ、ブロック塀があちらこちらで倒れていた。安全な道を選びながら進み、救助隊は、第1班の未避難世帯から安否の確認を始めた

1 軒目

針ヶ谷雪絵「ここは、2人世帯です。」

救出隊員A「わかりました。」

玄関のドアをノックしながら、住人の名前を呼ぶ。

ドアが開き、中から住人が出てきた。

針ヶ谷雪絵「大丈夫ですか？ 大きな地震でしたね。怪我をされている人はいませんか？」

住人「大丈夫です。家の中には、夫と私の2人だけですが、無事でした。」

針ヶ谷雪絵「それでは、公民館に避難しましょう！」

住人「いえ、私たちは…… スカイちゃんもいるので、このまま家にいたいと思います。」

この家には、かわいいパピヨンがいた。

針ヶ谷雪絵「スカイちゃんも家族ですものね。では、余震が続くようでしたら、必ず、公民館に避難してください。公民館には、災害時にペットも一緒に避難できる場所を確保していますから。」

住人「わかりました。余震が続くようなら公民館に避難します。」

雪絵は、区で災害時用に定めた班名簿に確認の○印を付け、備考欄に状況を記入した。

2 軒目

針ヶ谷雪絵「ここは、1人です。」

救助隊員A「わかりました。」

玄関のドアをノックし、外から声掛けると、家の中から「助けて！」という小さな声がした。

救出隊員B「中に人がいるぞ！」 救出隊員Bが叫ぶ！

救出隊員B「動けますか？」

住人「無理です。動けません！」

救出隊員A「ガラス戸を壊して、中に入り、負傷者を救助します。危険の無いように注意してください。」

救出隊がガラスを割り、家の中に入った。中では、住人が倒れたタンスの下敷きになっていた。タンスを持ち上げ、負傷者を救出した。

救助隊員A「家の中に誰か他にいますか？」

負傷した住人「いいえ 私だけです。」

救助隊員A「負傷者を担架に乗せて公民館に運んでください。」

救助隊員C・Dが負傷者を公民館に搬送する。

雪絵は、班名簿に確認の○印を付け、備考欄に状況を記入した。

余震が続いている。

3 軒目

針ヶ谷雪絵「ここは、2人です。」

救助隊員A「わかりました。」

玄関のドアをノックして、住人の名前を呼ぶ。ここの住人は、**雪絵**の友人であった。

針ヶ谷雪絵「マリヤ！ マリヤ！ 中にいるの？ 針ヶ谷です。」

玄関からマリヤが出てきた。

マリヤ「ゆきえ！ こわかったよ！」

針ヶ谷雪絵「大丈夫？ 旦那さん いるの？」

マリヤは、夫と2人暮らしである。

マリヤ「しごと！ いま いない」

針ヶ谷雪絵「危ないから、一緒に公民館に逃げましょう！」

マリヤ「こわい どうしていい わからない！」

針ヶ谷雪絵「こうみんかん Spasaisya！（スパサイシャ！） Spasaisya！（スパサイシャ！）」

マリヤ「Ponyala！（ポオニエラ！）」

雪絵は、日ごろの付き合いで、マリヤの国の簡単な単語は知っていた。また、マリヤは、公民館で行われている国際交流協会主催の日本語教室

に通っているので公民館に馴染みがあった。

もう一軒の家を確認すれば、雪絵の担当は終わるので、マリヤも救出隊や雪絵と行動を共にする。

雪絵は、班名簿に確認の○印を付け、備考欄に状況を記入した。

4 軒目

針ヶ谷雪絵「ここは、2人世帯です。」

救助隊員A「わかりました。」

外から見ると家が傾いている。屋根瓦も一部落ちてきていて非常に危険である。

外から住人の名前を呼ぶと、中から「おーい 助けてくれ」との声が聞こえた。

救出隊員B「救出にきました。家の中には、何人いますか？」

住人「2人いる。動けないが、2人とも無事だ！ 早く助けてくれ！」

救出隊員E「どうしますか？ 中に入りますか？」

救出隊員Eが救出隊員Aに訊く。

救出隊員A「・・・。」

建物は、傾いていて危険であり、倒壊により二次災害が起こりうることも考えなければならなかった。

適切な進入方法をとらなければ、倒壊の恐れがあると判断したため、消防のレスキュー隊に通報することにした。

救助隊員A「家が倒壊する恐れがあるので、我々による建物内への進入は断念、消防のレスキュー隊に通報します。」

救助隊員A「消防に電話してみてください。」

救助隊員B「携帯から電話がつながりません。」

救助隊員A「針ヶ谷班長、急いで公民館に戻って消防のレスキュー隊に通報してください。」

針ヶ谷雪絵「わかりました。マリヤと一緒に公民館に戻り、消防のレスキュー隊に通報します。」

雪絵の班は、ここで終わりなので、通報のためにマリヤと一緒に中央公民館に戻るようになった。

救助隊Eが建物の中の住人に声をかける。

救助隊員E「大丈夫か！ しっかりしろ！ いま助けを呼びに行くからな！」

救助隊員A「救助隊員Eは、ここに残り、中の人に声をかけ続けてください。消防のレスキュー隊による救出を確認してください。我々は、第2班に向います。第2班の班長さん 案内をお願いします。」

救助隊員Eは、ここに残り、家の中の人に声をかけ続ける。

中央公民館に負傷者を搬送した救出隊員CとDが戻ってきた。救出隊は、次の第2班に向った。

雪絵は、マリヤと公民館に戻ると、先ず、事務室で災害時用の電話回線を使って、消防のレスキュー隊に通報した。

それから、区長に雪絵の班の状況を報告した。

針ヶ谷妙「雪絵さん！ 忠宜たちをつれてきましたよ。2人とも無事だった！」

針ヶ谷雪絵「お母さん お世話様です。ありがとうございました。 忠宜！ 忠高！ 怖かったです。ママが迎えに行けなくてごめんね。

パパとは、まだ連絡がとれないけど、きっと大丈夫！」

子どもたちと母、マリヤと一緒に公民館の片隅に座り、配られた飲み物で一息ついた。

夫は、どうしているだろう？ 無事であるだろうか。災害用伝言ダイヤルを聞いてくれただろうか。

夫の無事を祈りながら、元気をだして、避難所の手伝いに向う雪絵であった。